



chapter 2

世界遺産・熊野古道

# 祈りの道を「守り」「伝える」

2004年に、「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部としてユネスコの世界遺産に登録された熊野古道。スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」に次ぎ、「道」が世界遺産として登録されたのは、きわめてまれな例。世界中から観光客が訪れるこの参詣道について、「守り」「伝える」という2つの視点から今の取り組みを探る。

## 類のない広大な文化的景観 地域と連携して資産を“守る”



### 地域の力が不可欠

神話の時代から神々が宿る特別な場所として崇拜され、山岳信仰の場として守られてきた紀伊山地の霊場（「熊野三山」「高野山」「吉野・大峯」）。標高1000～2000m級の山脈が東西、南北に連なり、年間3000mmを超える豊かな雨水が深い森林を育てている。熊野古道は、熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社、那智山青岸渡寺）へと通じる参詣道。和歌山を中心に、奈良、三重、大阪にまで広くまたがっている。

ユネスコの世界遺産に登録された翌年、和歌山県は、日本初となる「和歌山県世界遺産条例」を制定。「この世界遺産を自らの手で守る」という強い意志を世界に宣言した。和歌山県の観光局長・山西毅治さんはこう話す。「世界遺産の中には、登録後に、資産がその価値を失い、取り消される例があります。特に、熊野古道の場合は、「道」が登録対象です。その総延長は300km超にも及び、広大な範囲の文化的景観を守らなくてはなりません。大雨・台風などの災害、観光客の増加による古道の傷みが予測され、計画的な保全施策が大切。比類ない文化遺産を未来につなげるために、行政をはじめ、県民の皆さんの協力が必要不可欠です」

2007年には、「世界遺産マスター制度」を導入。熊野古道の保全と適切な活用を推進するための民間のリーダーを育成するもので、その任期は3年。現在、市町村の枠を超えて、98名が「世界遺産マスター」として活動している。その顔ぶれは、男女問わず、地元の学生から、仕事をリタイアした人までさまざま。資産をパトロールし、「道が断たれている」「木が倒れている」など、地元目線で発見できる情報を県の機関「世界遺産センター」と連携。ネットワークを築き、広範囲へのアンテナが張り巡らされている。

### 保全活動で“道”を守る

“道普請（みちぶしん）”と呼ばれる、先人たちが自らの通る道を自らの手で直してきた活動も今、地域の力で復活を遂げている。先頭に立つのは、和歌山県世界遺産センター長の辻林浩さん。「きっかけは、地元の中学校の卒業記念行事でね。世界遺産の登録後にあまりにも見た目がヒドイので、子供たちと一緒に古道にちよっとずつ土を入れて整備したんですよ。その後も、センターの人間5、6人で続けてね。そうしたら、道を歩いてこられる人たちが『手伝いましょうか？』ってね、あれよあれよと、広がっていったんです。これは、完全なボランティア」。2011年の台風

による大水害の時には、県内外の多くの企業も道普請に参加。今では、毎年約50を超える学校や企業・団体がこの地を訪れている。

### 登録範囲拡大の動き

そして県は、さらなる「追加登録」についても取り組みを進めている。2010年から5年計画で、新たな候補地を調査、保全活動を進め、国への申請、2016年にユネスコの追加登録を目指す。「これは10年前からの計画でもあり、宿題でもありました」と文化遺産課。県内には2004年当時に登録された参詣道と同等の文化財的価値のある未登録の参詣道が存在する。「大辺路をはじめ、高野山周辺など現在10力以上がその対象です。途絶えていた古道の一部を特定し、有識者、大学の先生などの協力のもと、石造仏、道標等の年代を調査、地形図を作成しています。このような調査が進められるのも、現在、地元の方々の協力を得られるようになったことが大きいです」

熊野古道が注目されることで、世界中から観光客が訪れ、地域の人たちもまた身近な資産への意識が変わった。そうなることで、さらなる調査を進めることができる——このサイクルこそ、熊野古道本来の資産を「守る」取り組みにつながっている。



左・左／紀伊半島の山深い場所にある熊野古道。左・右／熊野本宮大社へ向かう熊野古道・中辺路。江戸時代から残る石畳に出会う。下／熊野古道・中辺路にある発心門王子の社殿。





## 語り部——“伝える”ことで 観光客と地域をつなげていく

### 語り部の大切な役割

「雨が降るとね、杉の木の周りに霧がいつぱいかかるんです。そこに、日が差すと、降り注ぐ木漏れ日がね、無数の光線になって虹色に輝くんです。そういう景色は、一年のうちにいつぱいもあるものではないけれど、いつも期待しながら歩くんですね。昔の人もね、そんな光景に、この地での極楽浄土を感じたのではないかな」

そう笑顔で語るの、熊野本宮語り部の会・会長の坂本勲生さん。熊野古道の語り部の第一人者として知られ、観光庁が選定する和歌山県の「観光カリスマ」にも選ばれている。

「語り部」とは何か？古の道の自然や歴史、景観などの魅力を、一緒に歩くことで伝えていく、いわば「古道ガイドのスペシャリスト」だ。坂本さんは以前、地元、本宮町の小中学校で40年間教壇に立っていた。教員時代から本宮町の歴史を自ら研究。その造詣の深さから時折、熊野古道のガイドを頼まれることがあったという。そのことがきっかけとなり、退職後、語り部の道に。熊野古道が世界遺産

に登録される10年以上前から、「伝える」活動を続けてきた。

「世界遺産と言っても、ただ歩いたら単なる山道です(笑)。でもそれで終わったらもったいない。ここが世界遺産であることを理解してもらうための手助けが語り部の大切な役目です」と坂本さん。

### ボランティアでなく有料に

現在、熊野本宮語り部の会には、25名の語り部が在籍。月に一度は座学を開き、語り部それぞれが講師、生徒となり勉強会を行っている。坂本さんにとってうれしいのは、「語り部になりたい」という意欲のある人たちが集まってきていることだ。

「うちには、元英語の先生という英語のできる人もおります。手話や植物の話ができる人など、個性豊かなメンバーに恵まれています」

語り部がボランティアでなく、有料である理由が2つある。「ひとつは、仕事としての質ですね。お金をいただいているからこそ、プロとしての仕事をせにゃいかん。そうすることで「語り部」としての責任、技術も格段に向

上しました」。そして、もうひとつは、若者たちの就職の場だ。「就職先が都会ほど多くないこの町で、若い人がお金を得られる場をつくりたかったんです。今、地元の小中学生たちが「語り部ジュニア」として活動しています。彼らがいずれ、都会へ就職に出ていったとしても、また地元に戻ってきた時に、働ける環境をつくってあげたかったんです」

### 町人全員が「語り部」に

「お客さんが一番喜ぶのは、なにより地域の人と話をすることなんです。お客さんと一緒に歩いている時に農業しているおじさんを見つけたら、『なにを植えてるの?』と聞くんです。そしたら『こんなもん植えよるでー』で返してくれる。その時にお客さんにもいっぱい質問してもらわうわけですね。地元の人の食文化や生活に触れて、実際に作業している人と話したほうがお客さんにとっても印象深い。語り部が、お客さんと地域の人の橋渡しになる。それを続けていったら、最終的には「地域の人全員が語り部になる」。そんなことが実現できたら、うれしいですね」

熊野本宮語り部の会  
tel. 0735-42-0735  
www.hongu-kataribe.jp/



上/高さ約34mの大鳥居が立つ熊野本宮大社の旧社地、大斎原。左・右/熊野本宮語り部の会・会長、坂本勲生さん。地元本宮町史編纂にも携わり、編纂室長としても尽力。世界遺産登録の翌年は、語り部として年間1000kmもお客様を案内し歩いたという。左・左/地元の小中学生で構成された「語り部ジュニア」。その研究熱心な子供たちの姿勢・可能性に、坂本さんも太鼓判を押す。

熊野参詣の長き道のりを経てたどり着くのが、この熊野本宮大社。熊野三山のひとつで、社殿は国の重要文化財に指定されている。

